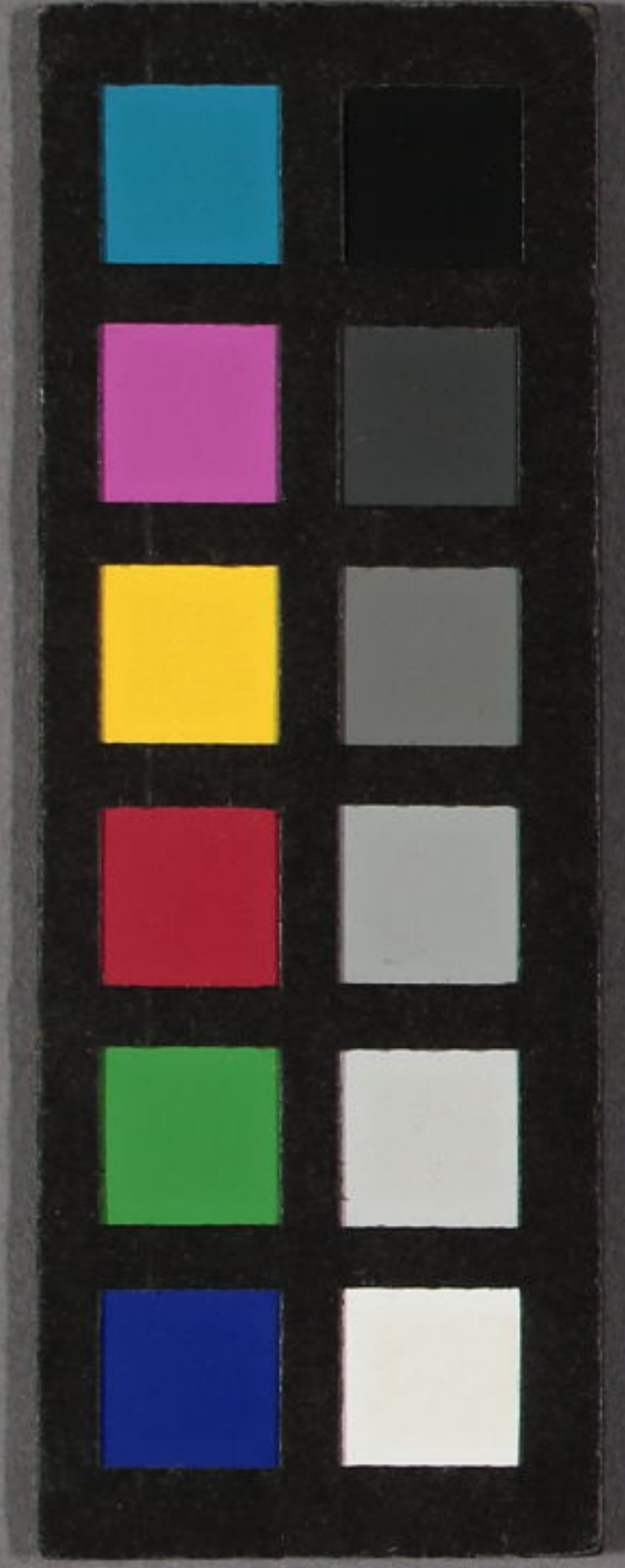


七部集大鏡

續猿蓑
宛瓜

五



続猿蓑注解

月院社何丸撰釋
天木堂公石 著

八九男さうくゝ取 降る 柳 二句

西華坊云けるよお降あり

去来曰我もも

坊云者先あり木曾塚の旧業ありて或人けるを
曰て云見く柳一は柳ハ白雲の去来は男の松皮著のそり
よる中枝らるるさうくゝお降るの八九男もさうよひらるるの
さうぬの降るさうぬりきあむむとられハ猿ハ降るの
あふさうらあふさうと見おらうてさうや大佛のあふらうえか
柳と見おらうとやさうくゝ続猿蓑よとらるの鳥の鳥あふ

葉とらふ節くく春風の降るぬりきさうぬく定めさ
去来曰我ハ春の幸ぬく一は別業よおさうてこの
去来柳のさう有つるさうさうくゝ有つる八九男の柳
さうハ降るハらうさうの降るさうくゝさうハさう大仏の
あふらうさうさうやけらうさうさうさうさうさうさう
濃舟云あふさうて二三る上さうてハさうぬものさうさ
柳の糸の身つるさうさうさうさうさうさうさうさうさ
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
あふさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
一書よ曰陶淵明の序田園居詩よ曰方宅十餘畝草屋八九
間柳柳後簷桃李羅生前とかうさうさうさうさうさ
上さうの大佛の柳よさうさうさうさうさうさうさ
ぬさうさう八九男はさうのさうさうさうさうさうさ
雨と見おらうさう

一書子回轉雨くくや露のぬく隙て時く日の戻りぬあや
柳のまはれ舞さくハ九思もそく一雨の隙に地を何とぞく系
曲のすくれくるはばらる或遊僧のまきして梅柳ハハ九思もそく
又くく詩人の常しよしてハ九思もそくをばらるりてまき
一書子云柳の糸は風をたひまきくるあうさきハハ九思もそく
ぬのゆるやうそくの見せさる

一書子云ばらるるくくの院敷まあれも意く用ひくく一書子云を
の舞あつそく赤紙ももる白之なる老湯の粒うして上りあて
ころきくと九天といひ雨もまきくく降りの之極の舞をさば
ハ九思もそくより降りていそくまきくく
一書子云あくくハ梅の雪をそくまきくく色ぬてよめ貫之の和舟
一歌して虚実の差をんと舞にせりそくもつそくむう又之の白く
母のをあくハ小舟埋てりりーろくさ
何くまきくくあくく門の書付

一書子云蔣翹く竹下の三聖を會く世向くあくや遊舞
限りあくあうーみ又あくあり

まうくくハ空けあられかーまき家
川まきく空けく舞まきくたよ中くさ

一書子云淫余く舞くく舞舞面影あつてまむう愁を
ゆくめる嬌態うあくは終くくされハくそくあめ人の絶
情をいつけてそくまきゆくまきれ

君所ハ林の竹あくハ恒かーく
吾路乃名子女房伴りり

空味堂云ひは密も云置一ハあきく娘そりる付
一刺を穿くくむのくあくく何くまきく

きみのくハ秋と恒がそりりハくその甘き
いさくまき書川すあくハーハ
そくのまきくさ乃をあくく飛

増補すると言ふは、服のきもちうて、法をいふも、
如くいふ、一、爲の滅ぼるるも、
不審之と云く、思考、
るを、
し、
部号、
左の、
家、
と、
紀、
と、
修、

赤、
山、
の、
の、

世の中 酒堂

け、
戻、
切、
修、
勝、

大、
中、
の、

一、

一、
か、
け、
悪、

字と賜と附たり帝ハ大命必上帝下帝是帝の賜
了くは可あらうと前白くわくわく二白の局
整と入るぬ阿而ぬ一又曰帝ハ聖徳天子大和國
之輪の里ハ三神ありて農家の者曰くハお夢る月
ハ六糸と空くハ佛法を穿く人

今宵賦

賦ハ布之給與也分界也責取也苦惡ともよま
陳補之事よりしてそ情と形とたハ明白ハ形客
一々を述る所分際来るハ譜ハ賦とのよま
何てハぬぬ妻をハ朱子曰直指其名叙と事之昔
筆毫耳と類是也

衣裳は湖の秋を食む

一書よま林氏詩と生修月印合衣裳湖上秋

志とく

心く

俗よく

警僧之頂のうく一撮の毛と袖ハ一重なり

晋書白蓮社記曰在僧在俗俗而在似僧者

其交の流きよハ砂川の石ハ小松を

ひくゆるうぬハ原ハ秋ハすくハ

且味をくハ人ハ飽るハ

管子曰よ人吏多詐偽無情實偷取

一切詭之鳥集之文鳥集之文初雖相驩

史考

史考莊子曰君子之交淡如水小人之交甘如醴君子淡以
親小人甘以絶彼無故以合者則無故以離

やうとくハ

好ひよあぢり〜か〜む

愚考杜律は曰明年此會知難健

罪 孟の教〜あ〜と 吞 せしむ

愚考李白り金谷園の杯〜く〜て 孟の教三斗〜と〜え
王羲之り蘭亭の會罰酒者十六人各詩成不の楚惠王
後群長作詩至吟給罰盃

夏のあや〜節〜り〜く〜明〜冷〜あ

一書り云水意と會ある冷〜あ〜とハ楚向〜あ〜ひ〜む
又詔の復秋〜も池のす〜る〜る〜冷〜あ〜く〜附を會
〜と〜え〜愚考水〜ひ〜や〜せ〜る〜冷〜あ〜の〜よ〜あ〜く〜く
黄冷〜く〜あ〜れ〜て〜の〜底〜も〜明〜く〜あ〜く〜附も極定〜
〜ん〜と〜あ〜れ〜ぬ

あ〜る〜し〜ユ〜夫〜と〜〜〜〜照 隆

あ〜れ〜る〜事〜一〜奇〜〜よ〜よ〜や〜ら〜く〜橋の盡

持佛の形〜よ〜の〜日〜さ〜〜〜

一説は昔その〜の〜は 律の由や昔良の里は橋を〜、
あ〜あ〜の〜終〜よ〜よ〜あ〜れ〜る〜の〜も

一書り云昔の〜日〜必〜日〜あ〜く〜決〜る〜も〜し〜れ〜ハ照源と
考りてユま〜す〜も〜理〜え〜決〜ハ〜人〜と橋を〜と見〜る〜く〜を〜別
の〜着〜の〜人〜と〜勢〜せ〜る〜と橋を〜あ〜〜あ〜こ〜う〜す〜〜こ〜男
〜と〜あ〜れ〜を〜い〜中〜〜も〜の〜さ〜か〜お〜り〜の〜を〜あ〜れ〜ら〜る〜ハ
何の橋も〜と〜この〜さ〜〜あ〜た〜と〜奇〜〜も〜〜さ〜ら〜く〜と
考〜ら〜る〜く〜あ〜ら〜る〜さ〜ま〜と〜扱〜は〜考〜て〜日〜糸〜の〜ユ〜ま〜と〜も
あ〜ら〜る〜

愚考昔の〜着〜の〜日〜必〜日〜糸〜を〜ハ照源のユま〜と〜あ〜ら〜る〜
考〜ら〜る〜より〜前〜は〜事〜は〜日〜糸〜ハ〜ワ〜ら〜る〜は〜あ〜け〜ハ〜降〜る
〜と〜い〜よ〜く〜ユ〜ま〜と〜附〜る〜も〜の〜く〜扱〜け〜日〜糸〜と〜ユ〜ま〜と〜ら
あ〜の〜字〜治〜の〜通〜者〜あ〜ら〜く〜見〜也〜〜橋の盡〜と〜ら〜け

くうの奇もあつたうも葉師の媚成りてく去
未至龍起のう附ちるは費之のうはあて一思成の
ユまてとく日よく定めそり日よくてウ陰橋の角
と空めお備はまの備よくはなく通急う本條其の
持併たるは形といはれ守海急う本條をたうゆへ
平生昭難の持併の形といはれ作らるもの之ま
あつて照成の持成は夕日の歌のう中のみの人
おのちあはれは懐くゆへは之の海へといはり
天文志曰習高飛而定天氣

森時かよ又えむたけう袖さく
一書よ云古ふこ一見つらてあひすれさくくは
月のおもてふあつたてり

形よ他ぬ茂白もあよ神橋

愚考杜子美々詩より曰鳥入性僻耽佳句語不驚人死
不休老去詩篇渾漫與春來花鳥莫深然形よ他ぬ
よまのうもあつたてり之の趣よ春來花鳥莫深然を唱とて
妻來花ハ別是初橋之意味深空也

詩人難くは曰詩のうよのみをのみて難橋の義とす
新おある

陳して曰橋ハ赤靴の花をぬ佳句とをさく一白
人と驚さむとく定よ難橋の義ハ深空也
又難くは曰詩のうを有の條よ述べて杜子美う糟
よあつたてり

陳して曰詩のう有の條よ述べて別處人のま條より
七言サハ字と僅十七文字のむたよつたてり
西又あつたてりま人阿口

家もろふはるよ持ひて文君も音も
破のまきふれよ思ひ出らるるよ

酒部へるよ琴の音よ室の花

愚考史記曰卓王孫至日中謁相如長卿謝病不能
往臨邛令不敢嘗食自往迎相如相如不得已彊往一坐
盡傾酒酬臨邛令前奏琴曰竊聞長卿好之願自娛相
如辭謝烏鼓一再行是時卓王孫有女文君新寡好昔故相
如綵與令相重而以琴心挑之

人の音もかく窺ひてまら様

愚考窺ハドと吟す人音もかくのまら
かふらいやくあけ細ハ窺もドと花は糖んたま
まらとのたぐるをまら

愚考音の音おとさむ山さく

愚考音音の音おとさむ山さく

下総の代金より献上の一ありて形丸く大少あり 尤割裂
方のおこその成事あり 又之佐金の云様よまらへ美
ト総ありん

愚考音も花や 飯米 ぶ十一 石

愚考音も花や 飯米 ぶ十一 石
五毛のりさくして五毛をとり結免をふむの記く
ハ音も花もまらもまらもまらもまらも

音も花もまらもまらもまらもまらも
りうかの音の成成きまら

音も花もまらもまらもまらもまらも

愚考音終り内姚宋依ら白よ梅花は月大情生

里坊は碓きくや梅の花

愚考惠能和尚行黄梅師五祖弘忍大師為行者在碓坊
梓白之間於是大悟受衣法吾族南為六祖唐憲宗皇帝勅
溢大監禪師

愚考は長力かくる柔葉の那

一書は回宗のむ踏ちりて細腔を大長刀よきふと
切けりやととくる奇の物と云く
愚考長刀丸の附

大長刀よなる風をふくると云る

愚考の細腔は福らふらむ

長力のりて武用無略は白薙刃を元来太刀なり
それよか〜とてつけて用ゆる故よ長刀と書く
されハ長力は短くして一振と云田邊考録は回光仁帝
長城の兵器は扱て作し心平法堅ぶ長刀の利を

まむして一門皆是と用ゆあれりて全依り兵器
と云る

愚考や柳のうらり萩の葉

愚考愚考ハ竹よせれ柳ハ正月花多の葉物よ
し〜何まも首の縁よのりまきる葉は柳と竹
とみきれ〜と云ゆ

芳野西行の歌

能のふれふすさま〜遊のも

愚考二心カウの能と唱ふるまうり五報姐は曰凡魚之
游皆逆水而上雖至細之鱗遇大水亦捨而上鳥ハ凡
は逆みて飛ゆす

山吹や垣〜か〜きる葉一葉

一書は七葉ハ重葉ハさけとも山吹のみのみさう
〜さうきりか〜きと〜の葉よ〜やあむ

小服綿よ光をこやうせよ 椿

愚考小服綿ハ葉のつむとの尾のつき十條より
何れも眼衣之考より別光相なり 浮陀の光昭ハ十二
光明之別葉を不捨の意之^{文妻首} 玉桂光紙みく
君代よるかたり 咲うとむけの花

振かこりりや 庚申の麻の角

愚考淮南子曰陽之至是以春則群獸除角

元日や 東海き 衣のこり 表

愚考待よ曰東方未明顛倒衣裳顛之倒之鳥公君之
又木葉よさうは海よあまの衣をいそぎ海又
よつかうの身をいそぎめはは古新の意故人

人も見えぬまや 鏡の裏に梅

一書よ云伊勢物語一月やあぬ春やむりしよる
ちりぬ赤牙ひとつハ女との力よりてくちぬ霞の

梅のほ香結矣よ白ひて鏡のえ梅 ころ只人にも
ちりぬさうとを事りぬ梅よ赤牙よとくさうと
ト長りぬ時

一書よ云鏡の宿の梅れいと見くされと赤牙
乃徳と見知る人もなき早鏡れうよ梅の花
ちりし時けさハあねと都々世の人の鏡乃面ハ見れ
さもうとある梅ハ見る人もなきめく世よとくれぬ
この白梅ハ

一書よ云深山よみ雪降り 難波人うし飛ちる
香葉竹うふは難波を鏡のうよ引きて鏡の
うと雪ハ人も見ぬとつひのむひらか

香葉草ハハ梅の吳名と
一書よ云さ人の人よちりぬ力ハ鏡のうりよ
鏡の面たハちり

一ひよんも新くわて強しわんく口惜か
むとあまき角のなくを比しその吟中略
鏡の裏の挿板のうりハ派信明家集より
かみと後みその介もあまのり之中と伴繁家集
ハ鏡の裏ハ鶴の形を待てけて作りられハ新よ
ともあまのいのひうまむ田舎のうをそを
る今後明あまよけをそ本拠とせしれしあ
もはまよ叶てしつる鏡裏の裏を見せ思ひ
やりしきお似たり又梅鏡後とて古鏡ハ
の形ハあまのうり後明より古鏡よりい
一書よ云墨梅の詩ハ瘦損昭陽鏡裏春と云
一書よ曰さくくの説ありと云さりて梅
いふハ易ハ良其背不獲其身行其庭不見其人無對
いつくめく近思録存養類程子曰人の其山よ

も則人の背れあし脊ハ立附もともさるる
中しいきかも思慮たうしとともはな
脊よ良ししやハえりあつて色男なき
とわししと蓋け古鏡より求せり一章よ
鏡の面よりつるものハ雅もえりし
附しハ墨すし西後あり
去味堂ハ原林耕齋曰世人不知鏡裏梅は吟ハ
後師いせの圖鏡のうり墨かしと
山田集

一書よ白陰あまの家の梅ハ灯をわけて
ををつくま来り湖東問答よし梅
照るあまのり
一書よ白陰あまの家の梅ハ灯をわけて
ををつくま来り湖東問答よし梅

五元集拾遺より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入
申して改トス

湖東同善より其角より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入
ハ勿傷前より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入
打しとて其の部より入ハ非ハ今も其の部より入
昔より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入
平を其の部より入ハ非ハ今も其の部より入

其考其角白解の鏡ハ一向取ハ是也
君より其角より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入
法隆大腰の鏡ハ一向取ハ是也
歳旦より其角より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入
其の部より其角より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入

其の部より其角より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入
其角より其の部より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入
其角より其の部より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入
其角より其の部より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入

其角より其の部より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入
其角より其の部より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入
其角より其の部より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入
其角より其の部より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入

其角より其の部より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入
其角より其の部より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入
其角より其の部より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入
其角より其の部より其の部より入ハ非ハ今も其の部より入

つらきものもあつて云々と食す時ハ老せず
年若しと云ふは彼女子是と食す
百金と云ふと云ふ
同國印寺ハ八百比
五尺の木像有と云ふ

電ハ雷雨と云ふ也

愚考ハマウ之立難姐曰電似是震之尤者但雨霰寒
而雨電不寒霰難晴而電易晴如驟雨余在奇魯四五月
之間屢見之不必冬也史書所載電大有如桃李者如鷄子
者如谷者如斗者これハマウを多し云の事なり
酉陽雜俎曰木再花夏有電又慶安二年五月十三日武所
川越ハ隆一電ハ大ニ斤小四寸あり人馬多死

燕の如きも

愚考 傍聖徒ハ詩ハ燕子 辭ハ業始到家社能啼
處在天涯是等の意も似たり
後ハ

一書ハ云古奇 漢ハ中ハ牛ケルナクハ時ハ遊田

愚考 食の奇ハ探集ハ力ハ万餘ハ例あり
時ハ漢の事ハ

眼ハ

愚考 衣ハ

石ハ

愚考 李中ハ
去海の入ハ
蔵人の帷子
公石云古今の
和名抄ニ
公石云古今の
和名抄ニ

体しつらぬしつらなる下らるる食めしむとあり
粘よなる蛇もねの暑うか
思考よまのの虫よねなる蛇の粘の用あり
神徳余の所よも蛇もねの仲も静よされ
伊吹のうの階あり

ありあや 蚕はく 桑の畑

一書よ五月ぬ鏡たれはよのうのひよふあふあり
るありされしも蚕するゆくよ桑畑よあて桑の
まよとよ絲のたれしよ是は何ゆたれハ蚕のまよと
ひかへぬくありしつらなるを蚕はくしつら
復しつら蚕のたれしつらハ桑しつら
若者 蚕のゆりしつらハ桑しつらハ桑しつら
やうありしハ別蚕のたれハ桑の摘取のよかあり
たれしつらありありぬのひハ蚕もまよたりし

あやあやしつらあまぬものごとしつら

十論為辨抄よ日故公の存白しつら附白しつら
古詩古奇と裁へしつらハ巻しつらよあましつら
其法と知りしつらと志の時ハましつらハ
もましつら 高附よ特学考他者連ハ世界の入り
知しぬしつらしつら集と入りしつらしつら
りたりしつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
けりし白氏文集と見しつら老學と痛楚しつら
この詞のありしつらつらつらつらつら

うらひ毒やけつらつらつらつらつらつらつらつら

ありあや 蚕ありしつらつらつらつらつらつらつら

かくいしつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
ておまの書情ありしつらつらつらつらつらつらつら
あしぬ人ハふのましつらつらつらつらつらつらつら

晋陶明とくしやむ

寛形、是書、一書、一書

一書、一書、晋陶明とくしやむと羨ひとあり、一、屏風、の画賛
なり、傳、曰、陶明、為、彭澤、懸、令、時、郡、守、遠、督、郵、至、
吏、白、當、束、帶、見、之、潛、歎、曰、吾、安、不、能、為、五、斗、米、折、腰、向、
卿、里、小、兒、耶、即、日、解、印、綬、屏、去、以、時、澤、去、尋、の、解、
有、身、行、を、和、の、の、り、ハ、十、百、一、の、官、と、止、し、里、の、の、り、
被、と、之、の、の、り、と、其、法、一、き、を、と、翁、の、の、り、
や、み、の、の、り、と、ま、い、

愚考、主、解、去、陶明、の、傳、の、み、く、く、く、文、よ、茶、白、の、
を、味、た、り、一、是、ハ、彼、陶明、々、五、六、月、中、北、窓、下、跡、遇、
涼、風、暫、至、自、謂、義、皇、上、人、是、と、く、く、く、や、み、の、
なり、山谷、の、卧、陶、軒、の、待、く、陶、公、自、漢、卧、守、宙、一、北、窓、
又、笑、花、類、葉、曰、采、菊、東、籬、下、悠、然、見、南、山、其、影、

神、之、篇、皆、寓意、為、遠、蓋、第一、之、建、廢、也、又、鶴、陽、公、曰、西、晋、無、
文章、幸、獨、在、此、篇、耳、二、形、く、仕、む、吏、と、和、く、宋、文、帝、之、
時、亦、く、幸、く、年、半、之、緒、節、先、生、と、諡、多、諡、は、く、曰、采、
德、安、衆、と、緒、と、云、或、曰、某、已、解、言、或、曰、寬、衆、年、終、各、緒、と、
云、好、半、自、克、と、節、と、云、是、等、の、意味、と、云、今、一、
必、月、二、の、伴、の、り、

今、の、この、ひ、西、の、一、等、又、後、あり、ひ、月、の、あり、く、乃、み、や
を、た、り、ひ、ひ、あり、を、花、と、ち、ひ、を、あり、く、
愚考、新、古、今、秋、の、身、て、月、の、桂、の、み、や、を、た、り、ひ、り、
を、花、と、ち、ひ、を、あり、り、よ、ま、く、月、は、花、あり、と、く、
と、母、老、り、を、と、花、と、ち、ひ、を、あり、り、く、美、を、た、り、ぬ、
と、つ、人、等、の、ま、く、と、書、る、を、あり、り、光、り、を、花、と、ち、ひ、を、あり、
流、い、棹、の、白、く、く、く、え、ゆ、を、花、と、ち、ひ、を、あり、り、
あ、く、の、ろ、根、と、く、く、く、月、又、か、

愚考 藤原公の因藤下所守 五万石を領せしめ

者への調年人の白くくありき

山多れちりきも其のや書の月

愚考 予は其の事としてありき山多のかけを
附を音ハ唱れたる山多ハ其の樹ハ山多と爲る
今予としてありきなり月日法元と皇元と誤り
てちりきも其の事としてありき山多のかけを

表よと老也とありきありき

お照り秘しき持て有りき

そのひありき

姨 持をききみよのちりきりし月

愚考 之を女とて姨持桂垣関書之桂木其の傳
きりきりききと傳く女其の國のちりきりきき
ありきありき

川よけ川りや月乃女

云石と孟子と曰徒流下而忘反謂之流徙流上而忘反謂之
連と云く流連流上之樂行

船形のまききりきりきりきり

愚考 七夕のしきりきりきりきりきりきりきり
織女乃張河の船よりちりきりきりきりきりきり
よ白紫安縣乃武妻山よ石船界有てれ船のしきり
しきりきりきりハ船形の雲と傳りしきりきりきり
七夕のまききりきりきりきりきりきり

愚考 長明曰事お濟り曰七月はありけり大宮あり
ありしきりきりきりきりきりきりきりきりきり
ぬ限しきりきりきりきりきりきりきりきりきり
新しきりきりきりきりきりきりきりきりきり
一いつそのみけりありきりきりきりきりきり

一書云云云云
月うけけりけり
夏うきうき
とらるる

老の名れあり

一書云云
何さり

一書云云
も有つ

松の
在天四無人
松風琴と

縮書や

公石云云
園の方

原

る持云
警か

農業

記

一書云云
それは
りふ
伊勢の

馬考題より画屏と有り騰と有りて白の魂と有り
ハハ画屏ハハフ不御所の持所あり一後藤氏の是
女の心成りと思ひたあふ侍成り必きやうり騰
のより、東渡より曰建久四年二月十五日の處より留土野
沖將之時將軍家督之若公始令射鹿給中不持野介進
勢子餅將軍家若云敷沖行騰於深上令痊愈給云と
くりくり東渡と巻物の画屏と有り不御所と
同しと云あり禮内則曰謂之福蓋諸假非纏於足
以見天子者子車父母然矣
度傳や著るありて屏の秋の書
み芳曰暮秋の淋しきとせありてゆるり
秋の書を著るありと云

掃の多あり、秋味、夢む、乃、也
公石云家よりあきハけよりゆるり候をよまらるる様よ
ありありハ候のよよりゆるりけ新の候より

稲つやや秋のふり、乃、徳

芭蕉行旅元より曰宵相叙のふりと云あり書と有
一書よりと秋風の吹よつけてもあまめくとも
つとつと為るなりけりとのふりもゆるりや
一書よりとあまめくとのふりハ之をよまらるる白くは高ハ
世より一休殿書と云ありて類書と有りの書は
酒多しと云ありより一休男女配遇の歌よまらる
くくく、酒よあまめく一休の道奇ハと云ありて
白くハ明くもなりと云
芭蕉家書よりあめ鶴と云ありてつひは夏夜と云
かきさるるもとの中をよまらるるものありてハ採集
抄よりあめ鶴と云ありてつひは夏夜と云ありて
別採集抄の事よりと云ありてつひは夏夜と云ありて
子仕下と云ありてつひは夏夜と云ありて

骸然有形下畧援髑髏枕而卧夜半髑髏見夢
曰子之然者似辨士諸子所言皆生人之累
也死則無比矣子欲聞死之說乎

乃ふちのり人よれお時ぬ

一書よふお時ぬは深き体をあき人の心
つらつらふ牛の世の人は年をよめて老をきりて

杉亭云韓偓の詩よ衰老何時見兄弟春
灯愁泣到天明不知短髮能多少一滴秋
霖白二莖一赤の待の意あるへ

文よ夜や鏡よりうつる一財ぬ

一書よ秋の玉園裏鏡中ぬをよの供よや云く

元禄辛酉初冬九日素堂菊園を控

愚考元禄辛酉とハ此之そハ癸酉にして元禄

六年物中ハ必是なり辛未ハ元禄四年にして八月
国より元禄六年ハ九月七日癸酉年一ハ月日字を是
と兼花いさく甲くちりまを

菊の夢や庭より一切の露の底

一書よ云花を初花を貴し初花乃越ひすく
ちり兼花一とせむの流てなきは若かり色のうら
ろひひりまを色一と入天馬の津代の後九月ハ
延喜帝乃西暦自よ南へ也入又よつて九月の妻
をよめし十月ハ秋葉の赤けりまむ延喜の津代
りも秋葉の赤けり水はまも是ハ秋のころなり
さるるや奇なりよめ秋葉を秋の赤くも
冬のけりめちありて一厚くあくすも也
愚考鶴林玉泉曰曇子一執雲三十年長孫送生一
然皮滓泥殺十年蓋貴而能復若陶渊明

十年著一尉言其賢也其入妻を留り移り
條やぬ取らぬ作らぬ柔人の友

五考撰出よ宋素の居士と陶淵明と宋素
ハ為陽縣とて松栢の館あり無法ハ秀ハ陶明の
りくるととるなり人見外洞中人ハ元詠中の書傳
りしとる石を以て聖事結の事あり

一書もあなきぬ菊乃水井

一書よ云ふ上人持やして金をやう人ハふふ
くハあなぬをりゆり

松平云揚出の請南とあやを執り長男ハ
書換るり史記列傳ハ委一危難ハ次子罷を
負ふるり多し金をとりて其罷を補んとし
長男ハ金を惜みて松平中あなりたし
この意をあやの述たすなり

あなきぬハ例乃長男の意也やあななる句
作あなるり

本か 一や琴中一吹く牛の妻

まう 一や葉上ハ兒ち守りの角

かひてそのの目よつてく守乃直風をくは
こひ吹風を并そく乃ニあり

美構郡 一子袴着せり

一書よ云美構ハあは貨難乃崇事りて持
真海嘉のあきり酢とハかみの程言やせ
時の白く見くきりさく尋事乃部賣の
袴总くも斗くくを面白くは福人の余
ち袴ハ似もつてぬ部賣るくも袴总る
よ一長せりて一休

美構警も 鴨ふ茶りり

馬考警の鴨小化或（まゝ）と云ふは、
ろく示雅ニ曰鴨ハ警也野曰鳧家曰警（警）赤を
さして馬とく人ありは、
と云ふり、
杜ま更や、
土由（土）と云、
許（許）と云、
本草（本草）と云、
小川（小川）と云、
負（負）國（國）後（後）の、
と云、
徳目（徳目）と云、
ちと云、
築（築）は、

て道（道）と云、
昔（昔）と云、
よめり一説（一説）と云、
杜父（杜父）と云、
日本（日本）と云、
と云、
草（草）と云、
和（和）と云、
食（食）と云、
躡（躡）と云、
か（か）と云、
移（移）と云、
才（才）と云、

在しと出六あうしず果取夫あり又一種あくと字を松
 了くて粒るりのあり股ゆくさるり意よりふりり
 くるりて又とよりをも河磨と云磨のくもり行底列
 たり鳴くく云給抄大和女事よ元印

何事しも桑入やうりり 淡々 会意

愚考鶴林玉露より日林時菟尊より鋪食玉枕因一
 履也亦袍蒲絮亦綿袈裟同一履也知此則食物
 寢貴可二視美はた或人難く日あまき等の句よ
 ち厚紙ありとも字ゆきとらふて
 陳しと云中少めとらふ句ハ二ツもあるそは起しを
 知所も何そ解せさくわや世人迷をとりて安ん
 たりり待たり予ハ句を解す唯其拙を摸るるて
 意業よとて温故知新を今も再權中納言通
 俊那るひたをかひたわくやうりけよくの

川とく入乃と幸形傳言今其よるり年々け款
 又を入しめくり人々かあるて古人の句を拙る
 ありあるりりとり頭をるりり止めく

置人よあつておも有年の香

抱侯云今世持人とわうりハ世ヤるりものそ
 ちりもりは是斗も世を拵る家者りみるりりの
 余情ハるりり

今人去家紙は所の身れるりりちりひり念りく
 着のせ屋よかけるりり句情りり

山寺り如樹りありり但盤り係

愚考義持六帖曰樹り々り二大羅刹り中類り最り終り
 龍氏り位知り不可り蓋り同り者也りさり其りは山寺りとりてり樹り
 ちりさりひりらりをり別りるりきりるりり

催佛や秋如と抱葉々り終りり

夏島(櫻島)達多と解飯王を子りて阿頼の奇く
新也と云降飯王の子なりと善堂書者の如きを以て
解飯王降飯王の二王は藤原太子と善堂二王の
かけ合せをとりて句とせり¹松葉達多大石三十
肘世書よかけし句との肘山井を良民に多の
藤原太子と申すは金部と藤原を碎けて一十
石佛の号よわくとも血あると云く

東よりまみ杖より白雲の墓 系

一書よま本朝文操は祝徳の奇くとりて下の句よ
ちわらわくわりのかみわりのとみし有と云く
五考は句よ一首の符を附合しして鶴と云の歌
よりし句のゆきと云解むは八藤原載々待多白
荆門一別各集編三十一集如夢中一歳致封書向
あ君か人蒼年意維窮は人八軍へし¹あ君か人ハ

少きと云

々々のくくのけり口きよまきしと云

首の符もろ 稲妻のふるまふ時

馬より種余終口書八日蓬宗の輪蓋寺あり上人刑死よ
空しく首の符よ附あふ¹符の奇瑞ありりれれ
赦えありしと云首の符 ともく¹の¹な¹存¹せり¹稲妻
ハ歌よ大刀取の符なりしと云¹と云¹と云¹
左傳曰賞以春
不追罪八年を扱

稲妻のまみ書しと云善堂書は来罪作

源しと云¹時山よみつる¹多分外

古書よ白ゆめ¹の¹舞¹の¹中¹り¹と¹中¹や¹魚¹ら¹と¹を¹先¹師¹曰
か¹る¹自¹の¹金¹符¹や¹ま¹り¹く¹仕¹と¹る¹もの¹なり¹と¹書¹え
風¹葉¹よ¹と¹改¹め¹り¹あ¹ら¹は¹り¹は¹後¹葉¹撰¹集¹の¹時¹り¹又
あ¹ら¹た¹り¹と¹時¹り¹さ¹の¹せ¹き¹あ¹ら¹と¹云¹

旅人の乃るくちも似く、柑の花

一書り云万葉よあわきはけまりの飯を茶まら
橘よりあまハ推乃葉よりかへし馬車せ持扱せ
るる慈森あまのりし凡柑の細きとたりの人を
橘とるるなり

説葉大金云は白ハ竹葉の信り中解しか
許いゝ殺害する小推の花のらるりも似く木葉の
橘と出たり白解の信一白事し以解まも融せせ
寸葉も旅人の乃推も似くく入いかよるやま
川舟乃るるたろくやそり唯後の不自ゆるるさ
よみらるるや都く世乃旅人を又く家より出
り旅りくくあま木葉ハましく山中不自せ勝
るるくくつひ推も似くあまハ柑花の柑乃
花の柑しき有りそりともく信ちるあま

ほくくをさるる乃葉よ今旅人を替りし
よあまのつりしはすつての旅人のつらさを思
て推の花乃るるまよまよまよ推ひたろく
中ハ風流も面白あまひとくは五器一具
會めさるるりし州ハ旅者兼ま考く五器一具
のあま師選乃るるを懐ふつまも甲乙
旅人を許さくさくさくさくさくさく
旅人のゆきを先考て云あす朝しるる
上略推の者乃るるも似く木葉の旅又くまの
るもたろく木葉の懐ま句一白もあま
しきさるるも今旅人の形見えま
をくつるる

旅人もあまの草をさるる
是れは白頭旅りし多食我兼三葉貫女葉

ひききか

まじりのさり中名持も更乃新よま後や能事の
く乃赤とけて者うりそのの契よ〜〜〜
疑事た〜〜〜

ひさこ

信濃何丸撰釋

序文の始末

愚考莊子小曰惠子謂莊子曰魏王貽我大瓠之種我樹之成而實五石以盛水漿其隆不能自拳也剖之以爲瓢則瓠落無所容非不呼然大也吾爲其無用掎之莊子曰夫子固拙於用大矣今子有五石之瓠何不慮以爲大樽而浮乎江湖而憂其瓠落無所容則夫子猶有蓬之心也又後漢書列傳曰費長房者汝南人也曾爲市掾有老翁賣藥懸一壺於肆頃及市罷輒蹠入壺中市人莫之見唯長房於樓上觀之異因往

再拜奉酒脯翁知長房之意其神也謂之曰子明日可更來長房曰謂長房翁乃與俱入壺中唯見玉堂嚴麗又藻志多藻八水壺の字有り志の跡きをとり有り又え鵝の詩も壺中天地乾坤外此の意を摘て書するに江南此強頑多に湖の人るを述るとりて號号をひさここととる字とり

木のりこふ計も 後と撰 ころま

一書よ花山院に製よ木此下をすかころます是ハたの記より花も有り人とも有りよ有りなり 一書よ西上人の木のりこも旅録をよきハより北山花のり有り方をきかたり喜徳知柳曰古今集よ他人のりけりてよ有り木の

月とを頼む心けりてみ塔ふらりその愚考
口を閉て守人の心よき事

月待て彼のの内裏の目 辰

穀 白 洗る 柳ありとやわき

一書よ彼のの内裏よ附らるる大嘗会の時
悠^キ元^ス主^キ記^キ指^キを^キは^キく^キ穀^キ白^キあり^キを^キを^キ献^キ家
拙丹後國よあり悠^キ元^ス主^キ記^キの指^キの^キ手
載集よ雲田の里に指をよそはけり
よあり 愚考日本紀 九卷曰天武天皇
五年六月丙戌秋友妻曰為新嘗十國郡
也^キ齊^キ忌^キ則^キ尾^キ張^キ國^キ山^キ田^キ次^キ丹^キ波^キ國^キ何^キ抄^キ歌
並^キ食^キと^キ云^キく^キ新^キ嘗^キ祭^キ用^キ明^キ帝^キ二^キ年^キ初^キ指^キを
祚^キよ^キ供^キす^キ也^キ則^キ新^キ嘗^キ之^キ悠^キ元^ス主^キ基^キの^キ謬^キ字
元^キ千^キ載^キ集^キよ^キ大^キ嘗^キ會^キ手^キ正^キ基^キ方^キ指^キ春^キ秋^キ丹^キ波

困雲田をよあり刑部卿龜養らめはちの
きてめす事よ此代る事よ雲田此村の指を
よそはけ

クヤのそさるよしよ指のそらり 二五

愚考其雨村五月五夕立林の雨とさ
よしよ指のそらりて此の時彼の移りあり
法よ曰同季よ五白去中よ彼の季るけ
きたん其白去よそを^キ鞆^キに^キけ^キる^キより^キ袖^キを^キた
る^キの^キる^キよ^キ彼の^キ季^キる^キよ^キさ^キ事^キよ^キ時^キよ^キ此^キ白
よしよ指のそらりて附白噴ひる格
別よ此歌又かりん

千部よむ危の盛の一事 田

愚考手初る事武帝天平二十年七月
法華手初るを踏て好ひあり事田原よあり

千部修成のついでに十代目上皇上人寛正年中
下野に玉立の田より今の一月田子移して本山と云
子より八上十日丑年八中十日寅年八下十日の石
傳去の三部經を二部と一毎年三月傍百人
まで修成の上の十日を本と云終ると云中千部未だ終
と云くは十日の芥子修成部を又修成する
後去傳門院の御影所小して亦くも門院の
号を傳ふ乎か信長公の割礼亦あり

此礼死るるをのりけりる人

愚考此礼の事々花山法皇三十三所の觀音
と巡おしより後人主礼不を巡るるを新云
埃囊抄世傳と曰花山院の遠世の後巡玉を微
形一より去程よ此礼を云ふの云々
既觀寺を思まむ故るなり此僧紀伊玉那智

山よ始り天流玉谷汲よ終る

然野見と云きと注ありなり

一書よ花台の形するしりりるる時を必花山上
皇の侍るなりと云く一書よ白川法皇ると
の侍るなり愚考花山法皇自ら遊ん然聖
のりる限らば白川法皇を保元祀よ然聖
淨を有りて聖年最御教度の由なる
事ハ形く焉と云く此聖ハ増鏡よ歩るる久
仁親王の年十一然聖一と云きりよ事あり
よりはらるる事ハ此聖ハ此初あり叶り

白鳥弓紀の図あり禎よ

一書よ續日本紀と曰菟志人の古より紀列
白鳥の國を獨の娘を持その女子志人を
志す女の指し弓白鳥と成て化し去の

執怪吳并終不出と云々 愚考此故のハ
以白よりや去指の注有りな来りて紀此
ありてら網有り紀の関与と云々紀列と和泉
の境陸山の関与山に在司次帝の家
傳へし一吳有り元来ききと云々此吳有
る有りて多たる云と唱る守と云々此吳有
の奇吳を後ふ者一解す一いつ
を紀玉津玉と一字有りる元明帝初
して云く玉於天礪の名二字少改補
ありて時按律紀伊く改心此於郡名ふ
を数多あり類々尚書曰父頑母罷臣
云注法有り徳美鑑ふ曰頑と世智の形と
き違はるはを次の白と酒とをけりるあり
るありと注能 賢才ありて酒汁呑むるあり

附あり

双六の目を置く ちて考るなり
太師曰枕子紙よきよけあるをみこの双
六を日をもとむらちてなるありぬ！やが
らきことらありよけをありくのけそあ
らきこのさいをあらひちてとらふもい
はぬも 愚考各物六帖に曰語双序
ふ白西坐より始り曹魏に流形一日本
双陸宋洪遵禮双云白木石盤瀧可尺
計長尺五寸厚三寸刻其中有路置二
穀子於竹筒中擲而擲法經上祝其
来以行子あり女中五棋子供る先師
一を去る勝倚人甚好之兩人對局自
朝至暮不已後記者亦後日不去其の

胡より書不至りて止りてんら老日をも移して去らぬの冠を名りのそ又双六の目を朱四を唐字揚を妃と兼戦の時定四出ら不皮て継衣を繕ふと又朱三を後一条院臣下と打あふ時言三篋子五位を繕ふ十字集の略文有り我朝より吉備を繕へ後朝有者尺二寸を十二月を表し横七寸二分を七十二候の法ありとは唯四方ちり字彙の表

愚考本朝遊使回急好者不法を食不居雅形阿と善し言て来と繕を形阿不乞不固ておるもの形をめて心をみる如阿又綴しるは言ふ又形をめて綴かしに

らののみま交表見る一と又続字彙集入急好の許ありおぬ多き之せしや阿とひのりや言符よりおきておはすし福さゆのうりおぬ方くら加おきておはすし不愈らてるま一せ符をよぬ多きとよむ一言を逆し繕をよ一とよみて知一し教阿法師の言しよぬ多き一せしやこ一と言符よたきておはさうし福く又うせむてハおぬをさりあふおぬら一とひしおぬ又右のぬくよみて志ふへ一是を字彙しひよを替て此歌の交又を一書の際と虚し修りしありあり智る筆のとならぬ峠越たり愚考此はより丹波一越寸峠あり一里をよ

る峻岨よ授く石言く本根たもとひらり牛
一る業物の通る一きよありけ 驪木りま搦峠と
りよとこや

杖のいり宮子のそらをもひらり
一書よ大塔まるとの侍るわつとと云

赤いふと一葉はうねりと一の書
庄野の里此 夫よたときま

愚考 龜山よいく葉の舟阿りととてとてめ
ひくこゆるまふんくま庄野を侍てあを
龜山の葉うとりの古歌を括しつる人此葉と見
て庄野ととてよひけしり此舟よ古人の
腋の中を割て見くやうよひよとちと
わくわくしとまきととてあつとつれとひよと
又をうとととさハさりあつと名取田治人名

るく勝自次才よあられ見込りるい出
うけり等一の産例よとるまうと口をつよあ
志母のまき極のトあて和目と

成美曰尔渡の海上あるまこととまきハニハヒ
とよむうととやあやえ文の以爲文郷あ
さ日さす葉名の海のふハとくを渡の心よ
のりてはらむ万葉詞飯の海のまよとくあ
りの葉のふとて見ゆ海士の船舟

遠よりの款をよ見ぬあまし
汗の息をうとて衣をえ跡
志まきりのまあまうらあけてあ

愚考 世絶あ候よ曰本院の侍様とくはあ色
一物とりの女あのをまきをあ色中一とりの平伴
この葉よあめしととまきととまきととまきと

とてふふと五日の共日とみくもさうさうさうさう
てありたり今宵一もゆのたぬとこの後さう
おとさひてさう人の掛入を伝へしり入附入
てゆくとふいり髪をさるるとすり入付後の老
中たのうけりゆをさるるといひてさうりの
おぬきておしりゆとさうしあさうは平仲う
らへ舟ちみとさる五日五りのやねのりあり此
附くをえよ三百目の雨ならむと後々の平
仲の侍ときむ老を三百れはりといひ

城下

愚考此書書るるて一白を海傍りふ似
と建とて叙坐とすゆの時を推しあはくは
又田舎りの熱的とするを建とむさうのさけ
まはりや物古崗の能よりて書るるら一

近海の白み人の親の燈籠の籠子うらちん
たりるく見え及くを燈籠の罪人此よやたるさ

林の夜塗の物やうの声
女帝花心細さる入おそいまで

愚考此書清門のゆ時良少将といひ色ぬ
み今宵たもむとらさうの建ハ女いさうさ
さうしてやちちり入るさちん目さうして
夜やうけゆとむとたりみゆくは可まらさ
者の老をれえす入世とつとやうそおのめ
と一ひひやわりの人さる世三つ今をさるの
よめおおとあきしてゆい愛よ見えゆとを
すきうまの此建お格送和致其よ入物治の
弟を二白引よもて備しり
見えさうさうて老を金り見すとめられ

つるまは世をみるのみと云ふと 町五と

愚考曰義上人の元新古今集よみしゆ寂
莫の昔の定本の志の多きよるのみとの
のやうな日そるき吉野山笠の窟よりの
雷車よりの歌の託女の巻きよるよ

一巻よるのみく 丁 百の 終

愚考曰歌よる丁百ありて終の安き不約得
よりのいりて又終の通有るなり 例函歌鑑よ
唐玄宗皇帝安録山ありすめりよるて百文
るらるて又運上すといふて不敷事実よる
つり替林玉巻あり玉巻を三司使征利剥下
絡綫出入元來以八十為陌每出綫陌必減其
三言後又為尺子餘除五文本朝よるて和漢
之才品終よる山崎と大津よる関をよるて京

所不継來の商人より百文よるて二文は
の裸役よるて往返よるて又百文のあは
又上於憲政の家老長尾素玄云々あり
代よるて欠満ありて長久の改をよるてハ代物を
五十六文よるて又百文の欠満ありてハ代物を
始よるて又日本紀持統天皇八年
鑄錢司をよる

古きもくち此殘よる 終 念

愚考曰東鑑曰為後守以奉行博賣土事
陸沙汰双六者於侍者可被許之至下
永可令停止之に一事殘目勝以下
終不論上下一向可被禁制之由被傳出也
りしるの類なり
時しる百姓ありて 烏帽子ありて

配みをもつて点し小供佛の蛤
多そくうきを松幽冥の泣やらむ

愚考百姓の自ら鏡金巻ふ法け又その百姓を
淡路の慶帝ふ奪ひしるなり其石の蛤淡路
より出守決ち檀の浦ふ引くを附くむ其の
のく風み大園寺鏡を吹透し

成美曰大忌も繩子も素名疑るなり大忌家
の生園なり又一書ふ園と龜山といふて出
俗タイコちとは清音といふ又一書ふ水口も
有又一書ふ園と龜山といふなり何なり云
枝村の花も多し地も多し西氣は手

田北斤隅ふ昔れ名さ
一書ふ琴自集りしるなり山田のふもなる
しるて残ふ子苗也枝のむらま古歌なり

龜の甲烹りしるなり時を鳴る
唯牛糞よ風此しゆくき

一書ふ不白業喰しるて多き季を定め
枯果しる案しるて弟三しるて案季を定め
しるなり成美曰根本律曰有二我共一驚爲
春親友遇天大旱池水皆空鷺欲東西驚
曰好自存活樂曰汝去我何不依可相持往
去我嘗曰汝銜一牧我口咬共去他園空中飛
遇人或見曰空中二我共銜一牛糞斤飛驚
曰不是牛糞因口落佛言如人口遇愚考何
らやしる海しるしるるの素といふ占詩
曰老龜烹不爛移禍於古素此詩の意ハ其
の孫將の時永康の民山ふ入て大龜を捕
是山龜しるなり又素龜と云故如何ト龜を用

まろるるくわい少舎龜を以て言て曰此度不
良なりて君ら為らばと詠人乞を怪し
むを人龜を吳王に獻らむと欲して舟に
乘りて夜を越里といふ岸に舟を流るる
て泊るるに夜をくみの樹の夜中龜を呼て
云乞をくわい乞を何ぞ呼らばや龜を云我
狗繫をくわいて將に烹らるるべし
何ぞ思ふくわい南に薪を乞すとも
我を流らざる何ぞも樹の云吳王に詠
乞を乞遊何ぞ必ず我をくわい樹を成めて
烹らむ龜の云多くぬのいふるるるる福汝も
及む樹則黙す吳王に呈て王に獻す孫権
命して乞を烹らむと乞を薪を車を燒とい
へとも詠乞の如く詠乞の恰を呼て乞を

乞を乞遊言て曰乞を烹らむ老耄を伐て
せよと忽解むと獻する人の曰龜と樹と何
善せしむるを伐る則彼樹を伐らば乞を
くわい所を解ると乞を口を綱の門舌を綱
の根烹らむ何ぞも乞を烹らむ死しては
ト龜の益何れと乞の益何れと乞を牛糞の
賜不應に又此度乞を東坡に坐右の銘に曰
坐中談笑慎^二桑^一龜^二牛糞^一の裏句く
百姓の木棉志中^二人^一と乞の末て
愚考博物志に曰十一月十二月甲を載く
木の末てと初を末てと木棉志中^二人^一
木の末てと初を末てと末と定め其
毒氣を憚らむと乞の末て

小糸をくわいゆもかゝ綱の繩

愚考確も榎子新論曰伏羲制_二杵臼之利_一
後世加巧踐確而利十倍也和漢文探曰
斷木為杵塈地為臼かゝ臼の繩上より下
けて力繩と次

独勝て翼の岡ひらき膝の内
踏端落てきゆる_二行_一體

秋萩の序前よちう_二坊_一之_二元_一
風呂の加減の志の_二く_一り

愚考傳小曰本式千句第二卷目は院連附
一々不必有_二一_一是則院連附の傳中を大切
のまゝなり夫をかりふ附合せ_二る_一あり發句と
長句を附短句と短句を附_二る_一あり次の間
法前_二の_一體も風呂寸へて傳授に_二夾_一ち_二く_一
解_二さ_一む_二る_一階上の_二少_一は_二あり_一

雀を_二あ_一の_二籠_一の_二ち_一い_二め_一き

一書小傳の餅の小舌を入る_二籠_一の名をちいめた
といふ 左曰ちあき_二る_一舌を_二え_一く_二む_一とする
時先百舌を_二と_一心と_二ぬ_一く_二る_一百舌を大中よ
う_二片_一み_二垂_一て_二さ_一る_二舌_一又_二垂_一舌と_二て_一籠_二よ_一入_二て_一
木上_二よ_一ゆ_二ひ_一片_二ち_一て_二鳴_一ける_二さ_一る_二舌_一を_二笑_一
て_二な_一る_二の_一ま_二ら_一な_二を_一え_二く_一こと 愚考_二あ_一て_二文字_一
を_二埋_一て_二さ_一る_二舌_一遠_二く_一は_二蟹_一鳴と_二書_一よ_二ハ_一如_二一_一

一説よ_二さ_一ら_二く_一る_二舌_一衣_二の_一俚言なりと云

一書よ_二え_一三大師なり_二角_一大師の_二る_一舌_二母_一よ_二知_一
る_二舌_一と_二稻_一の_二舌_一よ_二田_一の_二畔_一よ_二園_一在_二よ_一て_二是_一を_二
え_二ら_一く_二田_一を_二あ_一ら_二く_一る_二舌_一唐土_二よ_一て_二園_一の_二后_一復_二成_一

ある我知らるるやうかえのほ塊をあるく
みよよりてええ三大師もある 一書よ四舎
よて苗代の兎小角大師のれを竹縄まよ
たまきみてええおきより 左江曰我伝流よてら
苗代の兎小角のわしつるを串よきして立
る 愚案直なるうな雄中るれ白小角大師
井出の蛙のひやうく
誓文を百もまきくふれゆふ
まよみくくみより 供の待
須之をまよく物不自由なる墓ふ
愚考流式須之の巻紫の上のふきより
て須之(左近の侍より)紫の上を極別の山方よ
より誓文の詞よ一うど何くは物流阿より長
まきハ略すきて此侍柳の巻のほ息所の巻

まのふきよふきよハ須之を附て紫
の上よ定む是三百の流りより

狐のれそら 子 くり よきり

愚考何ゆらといふ書よ有るをこれより
汲之の内裏の時狐の求衣を製衣をらまむとて
白狐を袖とむと僕一 紀列雄の山の関吉山
口次郎方へ号を借よやうゆ脚よ茶夜山口
のゆら狐の来て曰此夜須之の物狐の我身
よ及よ子をまけきうはくまよ 不同語を
まよてけよ老狐を毛落て淫形く宝とす
よ是ら此謂を公よ片けて物狐のるを
思ふとくまよまやうよとさめくとおき
まよ山口奇異のれひまよ 彼我家よ傳
よふを衆子望く庫藏して永く教

生を止むと云う此子終くの怪後ありと云
しと云ふ者号号といふ此の事なる事ハ不用なり此
獣を祇と云ふ者日本冥冥記に云或祇女
子化して或人の妻ふ成て子を産むく其後不
家の犬ふゆゆく物ら逐身を何れをく其後
去て二度家入りてら此時素戔と名付
たりと云夫ふ一首の歌何り云や我
戸よれちぬ玉垣をひそりふくんをていふ
子ゆくふ狐を来つ寐るといふ訓をよめ
ふ惚ふ也
ちら花よ雪を然引すら者何うて
ふ惚のる場ふりゆらけらふ
愚考雪詰ち和事始ふ云千村休茶云
の時語次入の折雪をいふて茶履の裏

牛の皮を洗けてをきりりぬ此府も天正十六年
大岡秀吉公北野におわて大茶湯を催したるひ
百間の長屋を建て大小名も勿論大舎を
移してされるとも雪詰ふ北野の馬場を附て
二白の間ふ茶湯を執せしむるなり
神社考曰北野天神者右大臣道實公之靈
也昌泰四年正月二十日左近筑紫延喜三年
二月廿五日薨干配所葬于安樂寺天慶三年
菅靈託七条坊婢女文子欲樓右近馬場天
曆元移立祠于北野正曆四年五月遣勅使於
宰府安樂寺詔贈大政大臣正一位云々
追考
○龜の鳴くは故事を冷泉為家卿。○○○
川添みよりの夕ぐれを何とて云けは馬の
まゝらむき



